

地元の主婦らが中心に、子育て支援遊び場を運営・管理		面談年月
野沢3丁目遊び場づくりの会と冒険遊び場と子育て支援研究会 矢郷恵子氏他		H18年6月
(活動のフィールド) 東京都世田谷区		H13 のざわテットー広場を設立。 H14～H16 世田谷区から助成、プレーパークの運営、各種イベントを実施。 H17 協力者(矢郷氏)が、全国都市再生モデル調査を実施。
活動内容		
<p>「子ども達にもっと自由な遊び場を」という思いで開放された 160 坪の私有地を地元の主婦が中心となり、子育て支援の遊び場として運営している。水、土、虫、草、花、泥んこなど、自然と接することができる遊び場。当初は、運営費は世田谷区のまちづくりファンドの助成により実施していた。</p> <p>この遊び場は、プレーパークの活動と連携していて、ケガもふくめて地域のみんなで自由に遊べる環境をつくり、子育てすることをモットーとしている。</p> <p>プレーパークとは……</p> <p>地域住民が主体になり運営、管理する子どもの遊び場所。既製品のブランコやシーソーでなく、手作りの遊具、でこぼこの地面等があり、子ども達の創造力を工夫して、自由に遊びをつくり出すことが出来る。遊びの環境づくり、遊具作成、子どもの遊びや親の相談相手に、プレーリーダーを置くこともある。</p>		
「都市再生の担い手」として事務局が注目した発言等		
<p>プレーパークでは、子どもたちを好きに遊ばせているが「ケガと弁当は自分もち」をモットーにしている。地域住民が運営に参加していることで、運営者、管理者の垣根が低くなり、地域で子どもが日常的に冒険遊びができる環境を育てている。</p> <p>隣の家の方が地主さんで、土地を無償で提供してもらっている。</p>		
(写真1...テットー広場)	(写真2...テーブルで情報交換)	(写真3...ミーティング風景)
		
(写真4...公園のエンタランス)		
		

インタビュー概要

(活動内容についての説明)

活動の経緯

- ・「のざわテッターひろば」は乳幼児が遊べる子育て支援の遊び場。
- ・この敷地は 160 坪。隣家の方が地主さんで、無償で提供してもらっている。(水道代は管理主体が払っているが、固定資産税は地主さんが払っている)。
- ・テッターひろばのオープンは5年前。現代表者は小学生のお母さんで「最初はペンキ塗りに参加しませんか、という案内に誘われてきてみた。そうしたら隣接する目黒区内で活動していた子育てグループしかいなかったの、運営をすることになった。」と語る。
- ・最初の3年間、世田谷区のまちづくりファンドから助成金をもらった。ファンドの趣旨に合致することと、ほぼ要望の満額を毎年いただけた。

テッターひろばの運営について

- ・この事業費は助成金頼み。区のまちづくりファンド、世田谷区社会福祉協議会の助成金等を活用してきた。スタッフはボランティアだが、週2回来てもらうプレーリーダーの費用は出している。
- ・どこでもドア、いす、机、物置小屋などは、プレーリーダーと土曜日に参加する親たちの手作り。読み聞かせやカフェを開いている建物は地主さんが建ててくれた。

プレーパークについて

プレーパークは、06年度には全国に約210ヶ所ある。世田谷区の羽根木プレーパークが草分け的な存在。行政との協働で、住民たちの運営管理で28年続いている。区内には区からNPOが運営を委託されているプレーパークが計4か所ある。他地区には渋谷区、草加市、新宿区、国分寺、川崎市、仙台市、横浜市内などに常設の遊び場がある。武蔵野市では平成20年の開園を目指して準備中である。

プレーリーダーについて

- ・プレーリーダーは、遊具を計画、制作し、親たちとの話し相手や子どもたちとの遊び仲間としても存在し、遊び場の全体的な環境づくりを季節の変化や活動の流れを読みながら行う。子どもにも大人にも居心地の良い場をつくるために、運営側と相談して進めていく。
- ・しかしNPOや市民活動団体の運営で雇用契約が結べる遊び場は少なく、終身雇用の保証も無いのが現状である。全国のプレーパークでもプレーリーダーの給与保障は課題である。
- ・テッターひろばでは、現在のプレーリーダーはプレーパークで経験を積んだ人であるが、さまざまなネットワークを通じて人材を探している。

(質 疑)

: 矢郷氏他 : 事務局

平成17年度全国都市再生モデル調査では、どのような取組を行ったのか？

乳幼児を対象とした普通の公園での遊び方を調査した。396人の親たちの声を集めた。

世田谷では75%は集合住宅に居住しており、屋外の乳幼児の遊び場が公園以外にはない。分譲マンションでは、資産価値を損なわないようにと、外部や通路での子どもの遊びを禁止しているところもある。賃貸マンションは、大人には交通の便が良かったりして便利な立地だが、交通量が多い、敷地にゆとりが無いなどで子どもの遊びには不適合だったりする。集合住宅が一般的になり、ますます子どもの遊び場は身近な空間から遠ざかっていくと感じている。

調査結果は？

母親たちへのアンケートの結果、外遊びで経験させたいこととして、泥遊び、水遊び、虫取り、木登りなど、けっこうワイルドな遊びに人気があったのは意外だった。ラバー舗装は這い這い期の子どもに良いこともわかった。また、遊び方によって、公園を使い分けている。一定の広さがあれば、敷地は小さくても乳幼児期には十分利用できること。ブランコや滑り台より、砂場が滞留時間が長く親子で会話が弾むなどで人気があること、などが分かった。

そこからの進展は？

アンケートを元に、NPO や子育て支援団体等に、利活用のアイデアを出し合ってもらったところ、13のアイデアが出てきた。例えば、遊び道具小屋、外遊びプレーカー、乳幼児の庭づくり、自然観察、自然遊びの開催、など。このアイデアについて、区内の母親を集めたワークショップを開催し、どのようなアイデアを採用したいか、親たちの意見を収集し、具体策を検討した。

実現しそうな取組みは？

実現性の高いもの、実行を見合わせたいものなどに分かれたため、実現性の高いとされた、外遊びプレーカー、自然観察自然遊びの会、乳幼児の庭づくり等について、体制を検討し、実施している。プレーカーは、「2 hours クラブ」として、公園遊びサポーターが遊び道具を積んだりヤカーを引いて巡回し、子育て経験者がついていて公園遊びや仲間づくりを育てている。

プレーカーの広告	プレーカーの様子
	